大阪狭山市文化財報告書20

大阪狭山市内遺跡群
発掘調査概要報告書10

2000年3月

大阪狭山市教育委員会

大阪狭山市文化財報告書20

大阪狭山市内遺跡群
発掘調査概要報告書10

２０００年３月

大阪狭山市教育委員会

序　文

大阪狭山市には、大阪府の史跡名勝に指定されております狭山池をはじめとして、多くの文化財があります。狭山池ではダム化に伴う発掘調査によって多くの遺跡、遺構が出土し、古代以来の溜池の歴史が明らかになりました。

このような調査と併行いたしまして、大阪狭山市教育委員会では平成２年度より個人住宅等の建設に伴う発掘調査を継続的に実施してまいりました。本年度は狭山藩陣屋跡を中心とした調査を実施し、貴重な成果を得ることができました。本報告書はこれらの調査結果をまとめたものです。本書が地域の歴史をさぐる小さな足掛かりになれば幸いです。

調査にあたりましては、建築主の皆様ならびに周辺の皆様に多くのご協力を賜りました。厚く感謝いたします。

また今後とも本市の文化財保護行政に対するご理解とご支援のほどを、よろしくお願い申し上げます。

2000年３月

大阪狭山市教育委員会
教育長　岡　本　修　一

例　言

1．本書は国庫の補助を受け、大阪狭山市教育委員会が平成11年度事業として大阪狭山市内で実施した、個人住宅等建設に伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査の結果をまとめた概要報告書である。
2．収録した調査は以下の通りである。
　1　狭山藩陣屋跡　98－6区、99－1、－2、－3、－4、－6区
3．現地調査は大阪狭山市教育委員会生涯学習部生涯学習推進課市川秀之が担当し、同課谷義浩がこれを助けた。
4．現地調査にあたっては正名直方、鳥山文夫、米澤孝成の各氏、整理作業や報告書の作成については若宮美佐、橋本和美、笹岡裕里子、山崎和子、川上多江子、永橋千代子、山林久仁子の各氏の協力を得た。遺物の写真撮影は阿南写真工房に依頼した。
5．本書の執筆は市川秀之がおこなった。

本　文　目　次

序　文　　大阪狭山市教育委員会　教育長　岡本修一
例　言
はじめに …… 1

1．狭山藩陣屋跡　99－1区 …… 4
　　99－2区 …… 9
　　99－3区 …… 10
　　99－4区 …… 12
　　99－6区 …… 12

2．まとめ …… 15

挿図目次

図1　大阪狭山市周辺の地形と遺跡分布 …… 2
図2　調査地位置図 …… 3
図3　狭山藩陣屋跡　98－6区　東壁断面図　（S＝1／100） …… 5
図4　狭山藩陣屋跡　99－1区　平断面図　（S＝1／100） …… 6
図5　狭山藩陣屋跡　99－1区　出土遺物　（S＝1／3） …… 8
図6　狭山藩陣屋跡　99－2区　平断面図　（S＝1／80） …… 9
図7　狭山藩陣屋跡　99－3区　出土遺物　（S＝1／3） …… 10
図8　狭山藩陣屋跡　99－4区　平断面図　（S＝1／100） …… 11
図9　狭山藩陣屋跡　99－6区　平面図　（S＝1／80） …… 13
図10　狭山藩陣屋跡　99－6区　出土遺物　（S＝1／3） …… 14

図版目次

図版1　狭山藩陣屋跡付近航空写真
図版2　狭山藩陣屋跡98－6区　a全景、b井戸
図版3　狭山藩陣屋跡99－1区　a全景、b井戸1
図版4　狭山藩陣屋跡99－1区　a埋甕遺構、b第2面の遺構
図版5　狭山藩陣屋跡99－1区　出土遺物
図版6　狭山藩陣屋跡99－2区　a全景、b井戸
図版7　狭山藩陣屋跡99－4区　a溝、b全景
図版8　狭山藩陣屋跡99－3区・99－4区出土遺物
図版9　狭山藩陣屋跡99－6区　a全景、b土壙2
図版10　狭山藩陣屋跡99－6区　出土遺物

はじめに

大阪狭山市では昭和40年代以降に急激な人口増加が生じ、丘陵部を中心に住宅開発が進行した。近年においてはその頃の勢いは衰えたとはいえ、住宅開発は引き続き盛んである。また、当時に新築された木造住宅がここ数年建て替えや増改築の時期にさしかかっており、これらに伴う埋蔵文化財の発掘届の提出件数もほとんど減少の兆しはみられない。ことに平成11年度に限れば発掘届提出件数は若干増加の傾向にある。特にここ数年は狭山藩陣屋跡において歩道設置工事が行なわれていることの影響もあって、その周辺において建て替え、新築などが多くそれにともなう発掘調査が多くみられる。

本調査報告書においては平成11年度に大阪狭山市教育委員会が実施した市内の遺跡における個人住宅建設等に伴う発掘調査の成果を掲載する。ただし、狭山ニュータウンなど既に大規模な造成工事が行なわれた箇所においては、住宅の新築、改築に際しては、立合調査を実施している。立合調査の結果、遺構、遺物が検出されなかった事例も多くみられたが、これらについては報告を省略する。

大阪狭山市内の遺跡分布および地形分類は図１のとおりである。大阪狭山市は西側の泉北丘陵と東側の羽曳野丘陵に挟まれた地形で、この両丘陵の間にいく筋かの南北方向の谷筋が走っている。これらの谷筋から旧石器時代・縄文時代の打製石器がいくつか発見されている（上野正和「狭山の考古学研究と私」『さやま誌　大阪狭山市文化財紀要』創刊号　1992）。

弥生時代の遺跡としては、市域南部の高地において、弥生時代後期の集落跡が検出された茱萸木遺跡がわずかに知られるのみである。

古墳時代前期についてもいまだ明らかでないことが多いが、狭山池北方の池尻遺跡において庄内期のものと思われる遺構が確認されており、また狭山神社遺跡でも当該期の遺物が出土しており、沖積面における遺跡の分布が予想される。（『狭山池』埋蔵文化財編　狭山池調査事務所　1998）

古墳時代中期に入ると、泉北丘陵を中心にその造営が展開された陶邑窯跡群が東方へとその領域を拡大した結果、本市域西端にあたる陶器山丘陵とその北側に広がる高位段丘の斜面に須恵器窯が多く築かれた。古墳時代後期の６世紀中葉から後葉になると、陶邑窯跡群はさらに東方に広がり、本市域中に分布する中位段丘の斜面にも窯を築き須恵器生産を行なうようになった。７世紀代に入ると窯焼き用の薪や斜面が不足したようであり、７世紀初頭に築かれた狭山池の斜面に窯を築いた狭山池１号窯のような例もみられるようになり、その後窯は次第に作られなくなっていく。

狭山池の築造については、長らく議論があったが、狭山池ダム化工事に伴って狭山池調査事務所が実施した発掘調査によって、その年代は７世紀初頭であることが明らかになってきた。一連の発掘調査によって狭山池内において、中樋遺構、東樋遺構、西樋遺構、木製枠工などさまざまな遺構がつぎつぎに発見され、狭山地域の歴史像は豊かさをますこととなった。（『狭山池』埋蔵文化財編　狭山池調査事務所　1998）

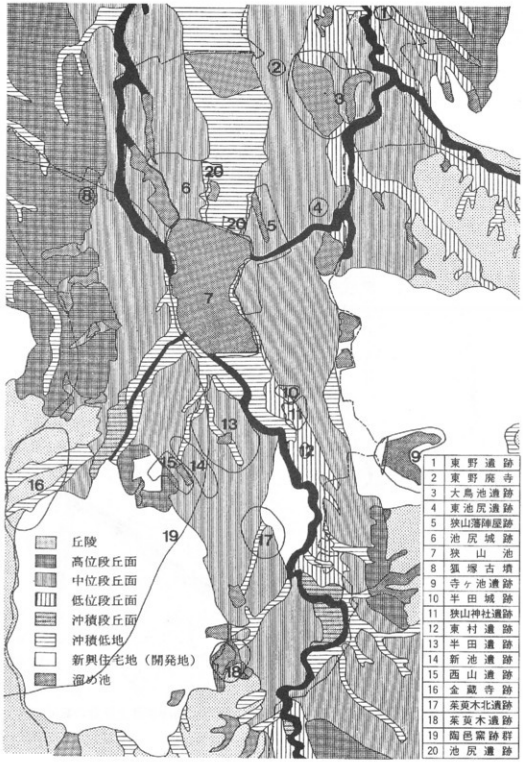


図1　大阪狭山市周辺の地形と遺跡分布

狭山池が築かれた西除川（旧天野川）に沿った大きな谷の東西に広がる中位段丘上には、東野廃寺、池尻城跡、庄司庵遺跡、狭山神社遺跡、狭山藩陣屋跡などの古代、中世、近世の諸遺跡が成立している。池尻城跡では昭和60年に大規模な発掘調査が行なわれ、南北朝期の城館が検出されている（池尻城跡発掘調査概要』大阪府教育委員会　1987）。また狭山藩陣屋跡においても建て替えや道路工事にともなう発掘調査が継続的に実施されている。

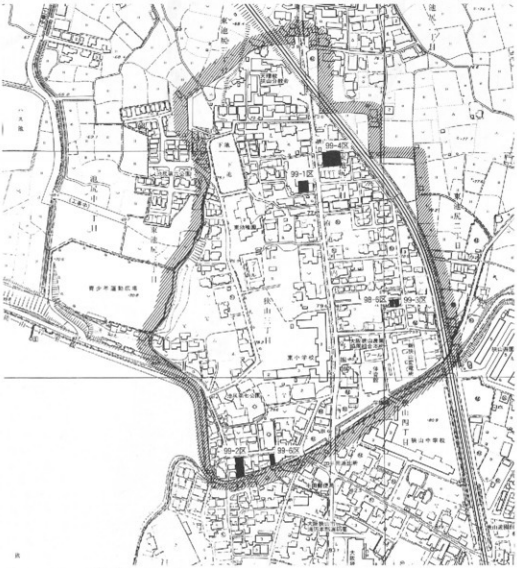


図2　調査地位置図（スクリーントーンは狭山藩陣屋跡上屋敷の範囲）

1．狭山藩陣屋跡

狭山藩陣屋跡は、狭山池東側の中位段丘上に立地している近世の城館跡である。豊臣秀吉によって小田原城を落とされた戦国大名北條氏の末裔が、近世初期にこの地に陣屋を開き、以後明治維新にいたるまでの間、一貫して陣屋が営まれていた。陣屋は北側の上屋敷と南側の下屋敷にわかれているが、御殿は上屋敷のもっとも北に設けられ、その周辺に上層の武士の屋敷が存在し、上屋敷の外周部や下屋敷には下層の武士団が居住した。また下屋敷は池に面した景勝の地であり、そこに藩主の別邸が建てられていた。

明治以降、狭山藩陣屋跡における景観は大きく変化し、現在ではほぼ全体が住宅地となっている。最近では既存住宅の建て替えや、小規模な再開発が頻繁に行なわれているため、狭山藩陣屋跡における埋蔵文化財発掘調査件数は衰えを見せない。このような小規模な発掘調査の蓄積によって、少しずつではあるものの、狭山藩陣屋の構造は明瞭なものとなりつつある。

今年度は発掘調査がこの狭山藩陣屋跡に集中し、本書には前年度の末に発掘調査を実施した狭山藩陣屋跡98－6区、および今年度に入ってから調査を行なった99－1、－2、－3、－4、－6区の調査成果を掲載している。なお、大阪狭山市教育委員会では本書掲載のもののほかに、公共事業にともなう発掘調査（99－5区）を実施しているが、これについては別に報告書を作成している。

(98－6区)

狭山4丁目に所在する。個人住宅の建築に伴って発掘調査を実施した。本調査区は狭山藩陣屋の上屋敷の東部に所在しており、明治初期に作成された「狭山藩陣屋上屋敷図」では牧山氏の屋敷地となっている。3.5m・5mの調査区を設定して発掘調査を実施した。現状地盤から30cm掘削したところで、地面を被覆する黒灰色土が存在し、それを除去したところ褐色土からなる地盤を検出した。黒灰色土中からは近代の遺物が少量出土している。褐色土の面においては遺構はみられなかったために第2面の検出に移ったが、予定されている建物の基礎はきわめて浅く第2面の遺構が破損される可能性はないため、全面的な調査は避け、調査区の両端にトレンチを掘削して遺構の状況を確かめることとした。その結果、東側のトレンチにおいて井戸を検出した。井戸内部の側面には瓦が並べられていた。井戸は調査区内に半分が含まれているだけであったが、直径は124cmであった。深さは第2面の高さから215cmであり、底面まで掘削したところ多少の湧水があった。

(99－1区)

狭山3丁目に所在する。個人住宅の建築にともなって発掘調査を実施した。本調査区は狭山藩陣屋の上屋敷の北側に所在しており、「狭山藩陣屋上屋敷図」によると藩主が住む御殿の一部であった場所である。建設が予定される住宅の規模にあわせて8m・8mの調査区を設定し、発掘調査を実施した。現状地盤より40cm程度掘削した場所において、第1面を検出した。顕著な遺構としては南北方向の溝1と、それに直行する東西方向の溝2を検出した。溝1は調査

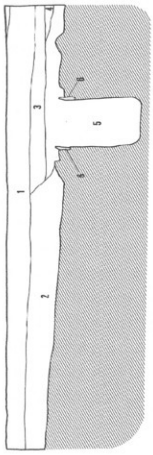


図３　狭山藩陣屋跡98―6区　東壁断面図（Ｓ＝１／100）

図4　狭山藩陣屋跡99－1区　平断面図（S＝1／100）

区内において長さ6.5m、最大幅45cmで、北側が浅く、南側がやや深い。溝2は長さ3.8m、最大幅90cmで底面はほぼ平坦である。溝1の東側で素堀の井戸1を検出した。直径1.3mでほぼ垂直に掘られている。それ以上の掘削は危険なため深さ1.3mまでで掘削をやめたが、さらに深く掘られている。井戸1の南側には直径30cmの小土壙があったが、そのまた内面には赤茶色の土師質の土器の一部が付着しており、かっては甕などが埋められていたと思われる。溝1よりも西側は厚さ10cm程度の砂の層がありそれを除去したところ土壙をふたつ検出した。土壙1は直径1.7mの正円形で深さ30cm。内部から瓦片などが出土している。土壙2は不整形であるが、最大幅は1.5m、深さ60cm。内部からは摺鉢や瓦片などが出土している。溝1の西側の砂層を除去した面は非常によくしまった礫混じりの土で、溝1以東が茶色粘土の地盤であるのとはまったく異なっている。調査区の端で部分的にトレンチを掘って断面を確認したところ深さ25cmについて土を掘削して礫混じりの土と入れ替えていることがわかった。おそらくは溝1より西側に建物が建ち、溝1はその建物の雨落ち溝であったと思われる。とすれば井戸1は建物の外部に設けられた井戸ということになる。第1面の調査が完了し、第2面の調査に取り掛かったが、この敷地に建てられる建物の基礎は非常に浅く、建築による遺構の破壊は第2面には及ばないため、第2面においては遺構の性格を確かめるための小規模な調査を実施することとなった。第2面は第1面より10cm～15cmほど下がった位置にあったが、5.5m・1mの南北に細長い調査区を設定した。非常に狭い調査区ながら三つの土壙を検出した。土壙3は東端だけが検出されており全体の形状は不明である。調査区内における長さは260cm、深さは15cmである。土壙4は染付椀、瓦などが出土している。土壙4はほぼ調査区内に全体が納まっており、正円形で直径は10cm、深さは24cm。遺物の出土はなかった。また土壙5も調査区内においては一部のみが検出されただけで、全体の形状は不明であるが、直角に曲がった端部をもつ。長い方の辺は調査区内において1m、深さは25cmであった。土壙5からは瓦片が出土している。

99－1区の遺物は図5に掲載した通りである。1～6は第1面より上の包含層より出土している。1は陶器の徳利の口縁部分。丹波焼か。2は肥前系磁器の皿。内面に二重線で円弧を重ねて描く。3は陶器の筒型椀。生産地不明。近代以降の所産か。4は陶器。残存部分が小さく用途は不明であるが、碗の蓋である可能性が大きい。表面の黄色の釉をほどこす。瀬戸美濃産。5は肥前系磁器の中皿。見込みに梅花、松、波文などを内部に描いた大きな花弁を描き、区画された外縁にも亀甲、草花などを描く。銅版刷りで近代以降の所産。土師質の甕。底部のみが残存する。外面はタタキ、内面はカキ目調整。堺産。7は第1面の土壙2より出土している。摺り鉢であるが、焼成がやや甘く、色調は黄色を帯び土師質に近い。外面はナデ調整。やはり堺産か。8～14は第1面の精査中に出土した第2面に伴う遺物である。8は肥前系磁器の杯。外面側部に鉄釉で線を描く。9は瀬戸美濃系陶器の碗。高台は削りだしでほぼ直立する。全体に黄色がかった透明釉を施し、見込みには緑釉で文様を描く。10は肥前系時期の杯。白磁であるが、外面にはナデ調整の跡が残る。11は陶器碗。外面には鉄釉、内面には透明釉を施す。高台、底部は無釉。丹波産か。12は土師質の小皿。13は陶器。底部高台付近だけがわずかに残るため、器種は特定できない。内外面には青みがかった透明釉を施す。産地も特定しがたい。14は肥前系磁器の碗。高台外面に3本線を、また高台の外周にも不整形の円を染付で描く。15は

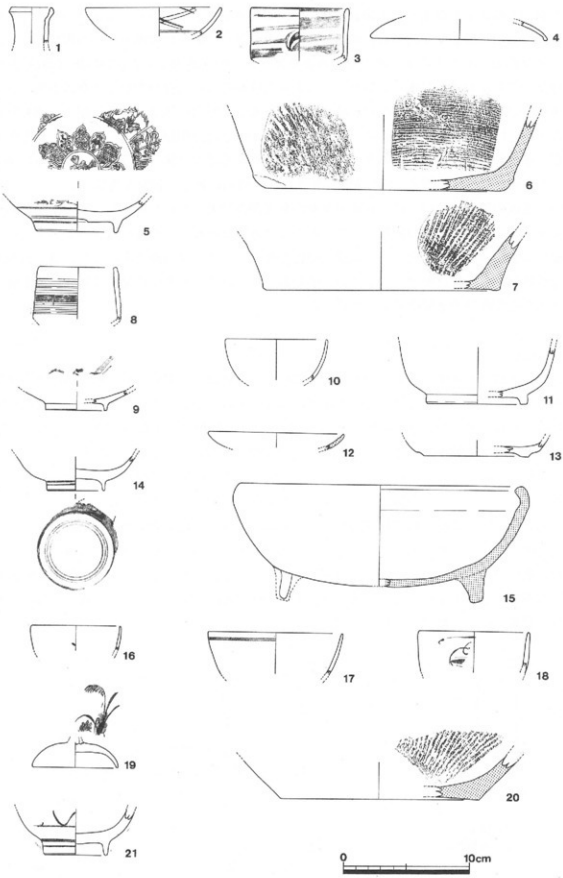


図5　狭山藩陣屋跡99－1区　出土遺物（S＝1／3）

第２面の土壙３より出土した土師質の鉢。内面にススが付着しており、用途は小型の火鉢かと思われる。口縁部がやや内傾し、側面はまるみを帯びる。底部には貼りつけの脚がつく。16～21は第２面のトレンチ中から出土した遺物で第２面に伴う遺物である。16は肥前系磁器の杯。口縁部分のみがわずかに残る。コバルトによる文様があるが残存が少なく詳細は不明。17も肥前系磁器の碗。内外面とも透明釉に細かく貫入が入る。外面口縁部分に二重線文。18も肥前系磁器の碗。外面に緑釉で文様を描いたうえに灰色がかった透明釉を内外面に施す。19も肥前系磁器。小碗の蓋か。外面にススキなどの草花を描く。20は摺り鉢。焼成は良好で全体は赤色がかった色調をしめす。堺産。21は肥前系磁器の碗。外面に線文、網目文を描く。

99－１区の周辺についてはこれまで何度か発掘調査が実施されているが、その結果とあわせても第１面の時期に御殿の建物が存在したことは確実であろう。今回は遺物の量がすくなくまた細片が多かったため、遺物から遺構の年代を押さえることは困難であったが、第１面の遺物は近世後期から近代にかけてのものが中心であり、やはりこれまでの見解と同様に第１面は天明２年の火事以降の遺構面であると考えられる。

(99－２区)

狭山３丁目に所在する。個人住宅の建築に伴って発掘調査を実施した。調査地は狭山藩陣屋の上屋敷と下屋敷にはさまれた並松と呼ばれる町屋地域の一部であり、敷地の前を東西に狭山池北堤へと続く旧道が通り、敷地の裏側には狭山池から流出する東除川が流れている。

5.2m・２mの調査区を設定して、機械、人力で掘削を行なったところ。現状地盤から70cm下方で茶褐色の粘土からなる地山面を検出した。調査区の中央付近で15センチ程度の段差があり北側が高くなっていた。南側の部分で井戸と土壙を検出した。井戸は調査区内に１／３が含まれていただけであるが直径は約2.5m程度と思われる。深さ120cmまで掘削したがこれ以上の掘削は危険であったために行なわなかった。土壙は円形で直径は80cm、深さ30cm。井戸、土壙ともに遺物の出土はなかった。この周辺の町屋は道に接して家屋を建てるものが普通であるため、本調査区で検出された段差は家屋の裏側（南側）端部を示すものと思われる。井戸は裏庭部分に設置されたものであろう。

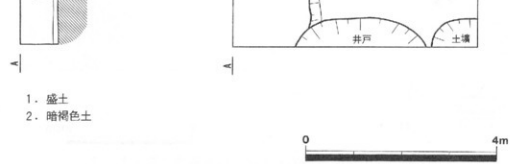


図６　狭山藩陣屋跡99－２区　平断面図（Ｓ＝1／80）

(99－3区)

狭山4丁目に所在する。個人住宅の建設に伴って発掘調査を実施した。調査地は本報告に掲載した98－6区の東隣の敷地であり、やはり狭山藩陣屋跡上屋敷の東部に位置する。地下の遺構の状況を確認するために南北6.9m、東西6.7mの交差するトレンチを掘削した。深さ50cmまで掘削したところ地山と思われる面にいたったが、その面においては顕著な遺構はみられなかった。ただ掘削の過程において近世の陶器等が少量出土した。予定されている建物の基礎はきわめて浅いため、仮にこの面において遺構があるとしてもそれが破壊される可能性がないため、調査はトレンチ調査にとどめた。

99－3区から出土した遺物は図7の22～29である。いずれもトレンチ掘削中に出土したものである。22は肥前系磁器の丸碗。外面に染付で網目を描く。22も肥前系磁器の筒型碗。内面に染付で菱唐草、外面に手毬文などを描く。24も肥前系磁器の皿。染付で外面に唐草文、内面に草花文を描く。25、26は土師質小皿。25は無釉だが、26には透明釉を施す。28は底部のみが残存して用途は不明。形骸化した脚をもつ。内外面には鉄釉を施す。丹波産か。27は壷の口縁部か。焼きしまった陶器で内外面に緑がかった透明釉を施す。口縁部は内側にむかって断面三角形に肥厚している。産地不明。29は摺り鉢。全体的に色調は赤色を帯びる。内面には櫛目を密に入れ、見込み部分にも粗く交差した櫛目を施す。遺物は近世中期のものが中心である。

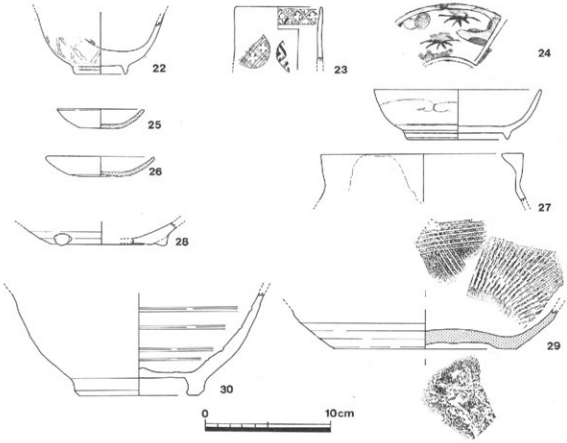


図7　狭山藩陣屋跡99－3区　出土遺物

図8　狭山藩陣屋跡99－4区　平断面図（S＝1／100）

(99－4区)

狭山4丁目に所在する。個人住宅の建築に伴って発掘調査を実施した。機械、人力で3m・7mを掘削した。調査区付近ではこれまで、南側隣接地の98－3区（『大阪狭山市文化財報告18』所収）など多くの調査を行なっているが、いずれも上下2層の遺構面を検出している。本調査区においてもそのような予想のもとに掘削を行なったが、第1面についてはまったく無遺構の状態であったため、第2面の調査のみを実施した。第2面においても遺構はほとんど見られなかったが、東西方向の溝1本を検出した。この溝は幅3.2m、深さ30cmで調査区の幅が狭いために長さは不明である。第1面と第2面の間の包含層中から近世の遺物が少量出土している。

99－4区から出土した遺物のうち図化しえたのは図7の30のみであった。30は鉢で、内面には沈線を入れる。内面にはやや白濁した釉を施し、外面は無釉である。唐津産か。

(99－6区)

狭山3丁目に所在する。99－5区は府道の歩道設置に伴う発掘調査であり、本書とは別に報告書を作成している（『大阪狭山市文化財報告書』19）。調査地は「並松」と呼ばれる狭山藩陣屋に付属する小規模な町屋区域の一画であり、調査地の前面（北側）には街道、背後（南側）には東除川が通っている。予定される建物は敷地のほぼ全体に建てられるため、調査区の東端にトレンチを入れて以降の状況を確かめた。その結果調査地の北側においては現在の地盤面から45cm掘削した箇所において茶褐色の礫混じりシルトからなる地山面を検出した。また川に近い南側のトレンチでは80cmの掘削を行なったが地山面は検出できなかった。このことからかつては東除川の川幅は現在よりも少し広く、それが多少埋め立てられていることがわかる。予定されている建築物の規模を考慮して敷地下側の6m・4.2mにおいて面的な調査を実施することとした。地山面より上には遺構面は見られなかったが、これまで建っていた建物の建築時などに若干の面的な削平を受けていることと思われる。道路端から8mの地点で、15cm程度の段差があり北側（道路側）が高くなっていた。本調査区から西へ80m離れた99－2区においても同様の段差が見られる。この段差よりも道側に家屋が建てられ、段差よりも川側は庭や菜園として利用されていたと考えられる。予定される建物の基礎が浅いため段差よりも北側において6m・4mの調査区を設定し、機械、人力による掘削を行なった。遺構面は地山面の1面だけであり、その面において三つの土壙を検出した。土壙1は調査区内において幅40cm、長さ140cm、深さ70cmであるが、幅についてはさらに道路側にのびる可能性がある。内部は黒灰色の土あるいは灰によってうめられており、瓦などの遺物もみられた。土壙2は長さ3.0m、幅1.6m、深さ1.3mのきわめて深い土壙で、ほぼ垂直に掘削されている。埋土は茶褐色土でほぼ一時に埋められたものと思われる。土壙底面には太さ20cm程度の材木が横たえられた状態で残っており、また側面の4箇所の端部にも丸太がはまっていたような丸い痕跡があった。これらのことからこの土壙の底面には丸木を横たえて基礎として、それを土台にして4角に柱が建てられていたことが推測できる。垂直に掘削された土壙の形状からみると矢板状の板がはまっていた可能性も考えられよう。また土壙内部からは瓦、磁器などのほか銅片等の金属片も出土しており、比較的最近まで使用されていたものと思われる。この場所にはかつて鉄工所が建てられていたことからそれに関連する遺構かと思われる。

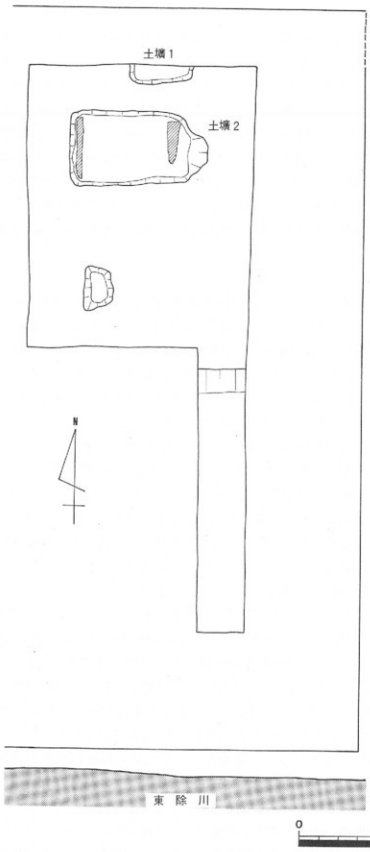


図9　狭山藩陣屋跡99－6区　平面図（S＝1／80）

99－6区から出土した遺物については図10に掲載している。すべて土壙2の埋土中かから出土した遺物である。1は肥前系磁器の碗。染付で内面に草花文を描く。2は肥前系磁器の小皿。外面に人物、底部に文字を描くがほとんど破損して読めない。3も肥前系磁器の碗。染付で外面には省略された鳥を描く。内面口縁付近には連続した羽状文を描く。口縁部には茶色の彩色を施す。4も肥前系磁器の碗。外面に大きく重ねあわせた花を銅版で刷る。5も肥前系磁器。下絵ののち青磁釉を全体に施す。内面見込部には五弁花、底部には裏銘があるが破損のため読み取れない。6は把手つきの小鍋。陶製で全体に黄茶色の釉を施す。口縁部が外反したのち立ち上がっているので、蓋付の鍋と思われる。瀬戸美濃製。遺物の時期としては、5のように近世中期にさかのぼるものから、3、4のように近代以降の所産とみられるものまでが混在している。

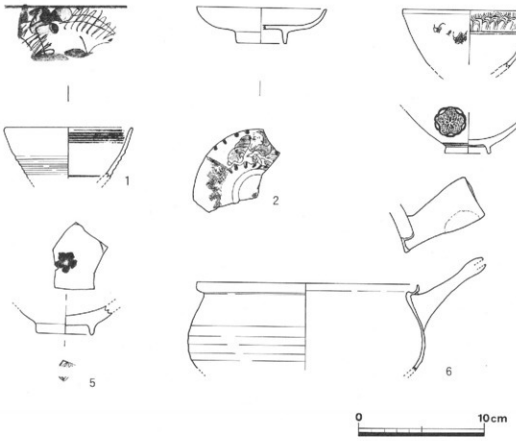


図10　狭山藩陣屋跡99－6区出土遺物（S＝1／3）

ま と め

今年度実施した発掘調査のうち、顕著な遺物や遺構を検出できたのは狭山藩陣屋跡における調査のみであった。狭山藩陣屋跡の上屋敷では現在、かつての大手筋をほぼ踏襲する府道河内長野美原線の歩道工事が行なわれており、それにともなって周辺の住宅の移転や建直しが盛んに行なわれている。このような傾向は来年度以降も継続することと思われる。

今年度の調査はいずれも小面積のものであったが、かつての藩主の御殿であると考えられる99－1区では井戸を検出し、また旧町屋地帯である99－2区や99－6区では町屋や鍛冶関係の遺構を検出するなど陣屋の内部構造についての細かな知見を得ることができた。府道の工事にともなっても大阪狭山市教育委員会では発掘調査を進めており、今後このような調査の成果と照合することによって総合的に陣屋の構造の解明を進めていかなければならないだろう。

報告書抄録

ふりがな	おおさかさやましないいせきぐんはっくつちょうさがいようほうこくしょ10
書名	大阪狭山市内遺跡群発掘調査概要報告書10
副書名	
シリーズ名	大阪狭山市文化財報告書
シリーズ番号	２０
編著者名	市川秀之
編集機関	大阪狭山市教育委員会
所在地	〒589-0005　大阪府大阪狭山市狭山一丁目2384－１
発行年月日	西暦　2000年３月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
	おおさかふおおさかさやましさやま 大阪府大阪狭山市狭山	27231		34度30分15秒	135度33分30秒	98－６区	17	個人住宅建築に伴う事前調査
						99－１区	64	個人住宅建築に伴う事前調査
						99－２区	11	個人住宅建築に伴う事前調査
						99－３区	7	個人住宅建築に伴う事前調査
						99－４区	21	個人住宅建築に伴う事前調査
						99－６区	25	個人用倉庫建築に伴う事前調査

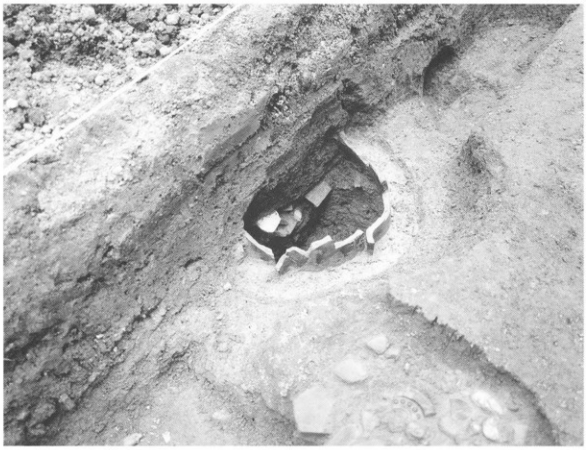
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
狭山藩陣屋跡	城館跡	江戸時代	99－１区／溝：１・土壙：４ 井戸：１	土師質甕、瓦質火鉢、摺鉢、 染付皿
			99－２区／土壙：１・井戸：１	
			99－３区／井戸：１	染付碗、染付皿、摺鉢、陶器鉢
			99－４区／溝：１	
			96－１区／土壙：３	瓦

図　　版

図版1　狭山藩陣屋跡付近航空写真

図版2　狭山瀧陣屋跡98―6区

a．全景

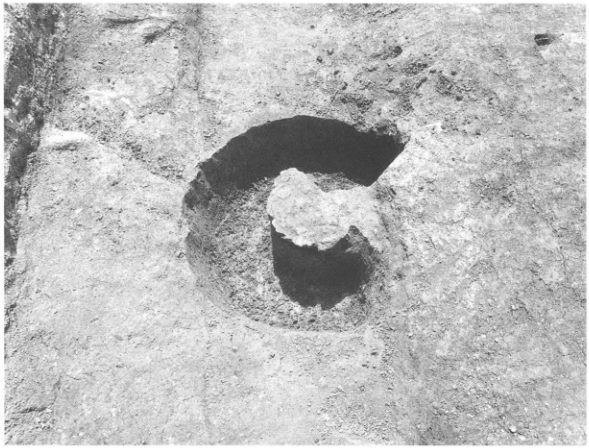


b．井戸

a．全景

b．井戸1

図版3　狭山藩陣屋跡99—1区



a．埋甕遺構

b．第2面の遺構

3

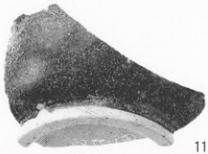
1

5

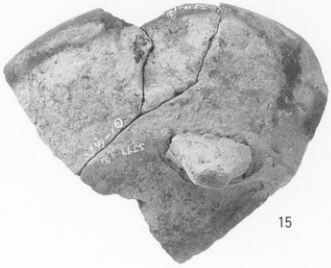
7

20

6


11

14

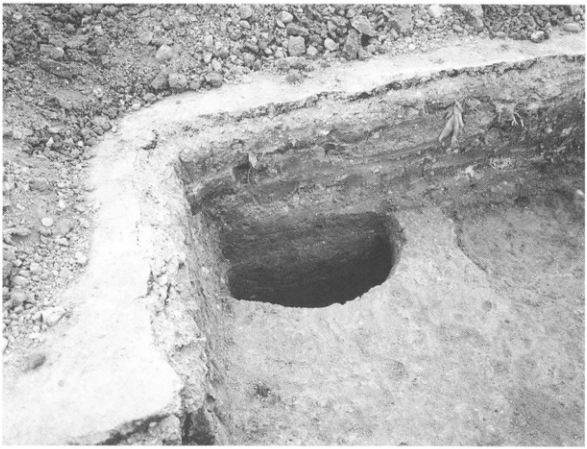

15

19

21

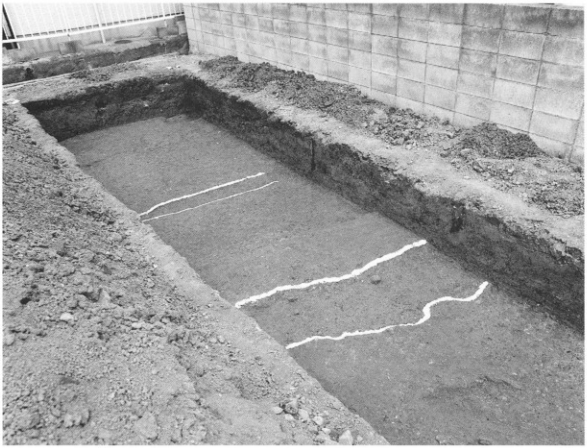
図版6　狭山藩陣屋跡99—2区

a．全景



b．井戸

図版7　狭山藩陣屋跡99－4区

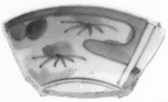


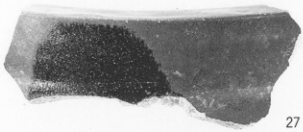
a．溝

b．全景

23

22


24

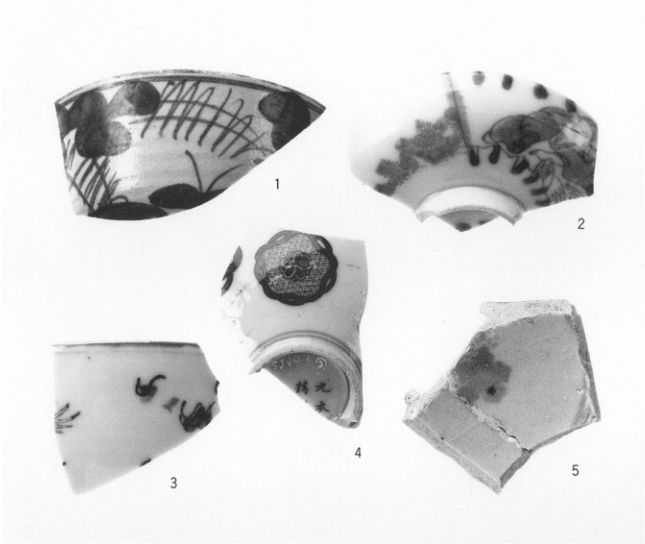

27

29

30

a．全景

b．土壙2


1
2
3
4
5

6

大阪狭山市文化財報告書20

大阪狭山市遺跡群
発掘調査報告書10

発行日　2000年３月31日
発　行　大阪狭山市教育委員会
印　刷　橋本印刷株式会社